

親子三人生き抜いて

南区支部 宮森 育子（妻）

戦没者 宮森 正夫

戦没地 セレベス島沖

主人の最期は、駆逐艦「帆風」の最後と一緒。昭和十九年七月六日九時六分、ダバオ発カウ（ハルマヘラ島）に向け船団護衛及び輸送任務に従事中、セレベス海にて敵潜水艦の雷撃を受けて瞬時に沈没、乗員八九名と陸軍将兵多数の方が戦死。主人は機関長附で機関室に向かう途中に魚雷を受けた艦が左傾し二分余りで沈没した由。戦死後三十年程経ってから生存者の集いに参加して、轟沈の詳細を聞かせてもらい受け止めることが出来た。

その時から、「主人は必ず帰る」の気持が変わった。子供二人を何としても育てなければならぬ。幸いに実家の母が健在で長女がこのまま三歳になる迄は、ここにおいて親と姉の世話になっても良いことになり実家に落ち着いた。しかし、一番頼りの姉が昭和二十三年九月九日過労のため病死。今度は私が収入の道を得なければならなくなり、横須賀市教育委員会に相談の結果、昭和二十四年より小学校勤務となった。長い間家庭内だけで暮らしていて環境の変化に戸惑うばかりで時間の有効利用もままならぬことばかりでした。

長男の小学校の入学式には大学生の実弟に保護者代理で付き添ってもらったものの、長女の入学式には、私も弟も仕事のため、小学三年の長男が保護者代理として付き添い、兄妹二人が手を繋いで入学式に臨んだことは一生忘れることはできない。子育ての中でお金に困ったことがあった。その時、お二人の方に助けられて、今があることを記したい。

長男が小学二年の時、腹部の激痛を訴え、立つことも寝ることも出来ない、足を伸ばしてタンズに寄り掛かせると少しは楽の様だった。翌朝大至急で市立病院に行くと即入院となり、診断結果は寄生虫によるものとのことで、一週間ほど入院して寄生虫を除去すれば治癒することになったが、私は仕事で付き添うことも出来ず、治療も苦しく不安であつたらうと息子には謝るのみであつた。

元気に歩ける様に回復して安堵したものの、病院の支払いの用意はない。仕事の帰りに親戚へ借用のお願いに伺ったが、「貸す金はない」と一切取り合つて貰えず、土間にあつた里芋を袋に入れて渡された。一刻も早く病院に行かなければと思うが電車賃がない。電車を歩いてでも長男のところに行きたいが遠く一晩は掛かるし危険である。そうだ、この里芋で電車賃を作ろうと、駅周辺のお店を一軒一軒お願いに歩いた。夕食の卓を囲んでいる時間であるが、病院へ行かねばとの一念でお店のガラス戸を開けてひたすらお願いした。六軒目の家でやつと袋の里芋を買っていただいた。涙も拭かずに電車に乗り、周囲の目も構わず泣き続けた。「貸す金はない」と突き放されたことで、お願いすれば貸して貰えたと、返金の目処もないのをお願いした自分の甘さを受け止めなければならなかった。

面会時間ぎりぎりに病室に入ることが出来たが、長男の退院は目前である。翌日、勤務先の友人に事情を話してお願いしたところ、用立てて下さり、無事に長男を連れて退院することが出来ました。本当に助かり有難く、しかも、「返さなくともいい」とまで言って下さいました。直ぐにお返しすることは出来ませんでした。六十歳で定年退職金をいただきましたが、大切なお友達の心を自分の生きる力とすべく、敢えてお返しはしなかった。

現在八十六歳を過ぎようとしている。助けて頂いた何分の一にも満たないだろうが、嫁と娘と三人でお礼の気持ちで伺いたいと思っている。用立てることをきちんと拒否してくれた親戚の思いやり、私はそれ以後、生活費の借用はしていないが、一回だけ助けを求めたことがある。長女が大学受験で二校に合格した時のこと、最初の発表校は直ぐに入学金を支払わなければならないために、二校目の入学金が不足となった。本人は出来れば二校目に入学したい希望を持っていたため、使用目的と返金時期を明確にしてお願いしたところ直ぐに用立てて下さった。

私は、両面からの温情に接し、家族三人が生きて来られた幸せに改めて感謝の念で一杯であることをお伝えしたい。

長男は父親に抱っこされた写真が二枚程あるが、長女は出征後の誕生のために父親を写真でしか知らない。有難いことに、長男が中学二年、長女が小学五年まで実家に同居していたので鍵っ子にならずに成長出来た。現在の住居も主人の実兄と長男とが話し合いで決めて頂いた土地である。

平成六年、主人の五十年忌法要を営んだ。親戚、友人、知人等大勢の方々にご供養していただ

いた。残念なことは、長男が癌で早逝して、今夏七回忌法要を済ませたことである。

昨秋、娘と二人で厚生労働省主催の北ボルネオ慰霊巡拝団に参加することが出来た。セレベス島に近い北東方サンギ島の漁港突堤に祭壇を設けていただき、参加者全員で当地域方面での戦没者へのご冥福をお祈りした。

「ボルネオ戦没者の碑」の前の慰霊祭では、参加者を代表して「追悼のことば」を述べる事が出来た。県知事からの献花の写真も帰国後に感謝の気持とともにお届けした。